

『白氏文集』「洗竹」の十三・十四句目に次のような句がある。

小者截魚竿　小なる者は魚竿に截り

大者編茅屋　大なる者は茅屋に編め

(傍線筆者)

この字句は白居易が、太子少傅分司時代(六十七歳)(八三八年)洛陽の自宅の竹が、密生しているのを見兼ねて疎にしたことを叙した作品である。ここでは作品全般からの投影は見られず、道真はこの作品の二句を抄句として使っているものと考えられる。

「雪夜思家竹」の詩全般について

この詩は、太宰府謫居時代の道真の詩風の変遷をみる上で重要な位置を占める作品だと考える。筆者は別稿(注二)で太宰府時代の作品を詩風の変遷という視点から三期に分けてみた。その中でこの詩は「太宰府謫居二期」の作品群の特質の一つとして取り挙げた次の点の好例として取り上げることが出来る。

「太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが「自然の事物」を「事物」として見つけることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」をはかる作品が目立つようになる点

この「490雪夜思家竹」では、謫居での雪を目のあたりにし、京の自宅の竹の様を想い起こし、十三・十四句で